

令和元年9月27日現在

機関番号：54502

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2015～2018

課題番号：15K02551

研究課題名（和文）日本手話の動詞連続について

研究課題名（英文）On Serial Verb Constructions in Japanese Sign Language

研究代表者

今里 典子（Imazato, Noriko）

神戸市立工業高等専門学校・その他部局等・教授

研究者番号：90259903

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,800,000円

研究成果の概要（和文）：日本手話(JSL)のような視覚言語は、実は他の音声言語と同様に文法を持つ言語システムであるにも関わらず、手話使用者以外からしばしば、ただのジェスチャーの集合体であると考えられる。音声言語を対象とした先行研究のおかげで、内容語が特定の環境で文法要素に変化する過程である「文法化」が文法を生み出すことがわかっている。本研究では、JSLにおける文法化が起こる環境の一つは複数の動詞が連続する動詞連続構文(SVC)であることを明らかにした。そして動詞連続が文法化のために最適な環境となるために従う条件を規定した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

言語学理論へは、JSLデータの記述保存、類型論の視点から視覚言語と音声言語の比較を可能にすること、手話言語の文法の萌芽と背景にある人間の認知能力の関係の解明が「言語」システムそのものの解明につながることで貢献できる。さらに二次的な意義として、今後予想される手話言語利用拡大時には、データと研究成果が文法書・辞書作成、通訳養成、手話指導等の準備として近い将来社会に広く還元できる。

研究成果の概要（英文）：A sign language, such as the Japanese Sign Language, is often believed to be a mere aggregation of gestures by non-signers, even though it actually is a complex sign system with rigorous grammar. Thanks to a number of previous studies on spoken languages, we already know that “grammaticalization,” the process of a content word changing into a grammatical element(s) in a specific circumstance, has been recognized as one of the processes of creating “grammar.” Our research clearly shows that serial verb constructions, predicates made of plural verbs, facilitate grammaticalization in Japanese sign language. We also determine the precise conditions that serial verb constructions should follow to be the right circumstance for grammaticalization.

研究分野：手話言語学

キーワード：日本手話 動詞連続構文 構文 文法化 移動構文 動詞分類 類辞

1. 研究開始当初の背景

Supalla(1990)は、アメリカ手話において、移動表現を表す述部が動詞連続(SVC)の形をとる事を観察したが、その後JSLにも同様の構造がある事が報告された。例えば今里(2007)は、JSLの移動構文では、典型的には述部は様態動詞+経路動詞という2つの動詞が連続で並ぶ事、「方向一致制限」を満たせば経路動詞2つ並列の可能性もある事等を明らかにした。市田(2013)は、JSLでは「活動局面を表す他動詞+過程局面と状態・位置局面を表す自動詞」が動詞連続構文(以下SVC)で表れ、SVCではこのパターンが一番多いと主張している。しかしデータが少なくSVC全体の実証的な検証はまだ行われていない。日本手話(以下JSL)におけるSVCがどのように成立しているのかを明らかにすることは手話言語の言語としての性質を明らかにするのに有効であると考えられるのである。

2. 研究の目的

SVCの構造から統語要素が生み出される可能性は、すでに様々な言語で指摘されており、例えばMatthews(2006)は、中国語のSVCが、それを構成する動詞が文法化する環境として機能する事を示している。Imazato(2010)は、JSLのSVC「V+行く」の「行く」が文法化を経て、命令や勧誘を表す統語要素となった事を、さらに今里(2014)は、JSLのSVC「見る+V」が、「見る」を主語/目的語標示の助動詞に変化させる環境であることを明らかにした。このような観察や指摘は少なくないものの、いかなるSVCが文法化の環境に成りうるのか、またどのようにしてそれらの統語要素を生み出す環境となり得るのかは、Shibatani(2007)の仮説のような試みもあるが未解明であると言える。JSLにおけるSVCの正確な記述を基に、統語要素が生み出されるシステムの解明を目指すことが本研究の目的である。

3. 研究の方法

JSLのネイティブ・サイナーの協力を受け、統語的振る舞いや意味によって分類したJSLの動詞リストを作成し、これらの動詞の組み合わせの可能性から、SVCの述部を持つ表現を撮影・分析する。一般的な移動構文、結果構文、使役構文等のみならず、使役移動構文などについても広くデータを集める。それらの分析から、SVCにおいて、1)いくつの、2)どのような意味の動詞が、3)どのような組み合わせで、4)どのような順序や規則で並ぶのかを詳細に記述し、5)様々な構文との関係をも明らかにする。収集したデータについては、類似する日本語で見られる複雑述部(複合動詞、テ形述部、従属/接続関係の述部)等とも比較し、Aikhenvald(2006)が挙げている、「類型論の視点から見てSVCに起こる傾向のある動詞群」と比較し相違点を検証し、JSLの特徴を特定する。そして、SVC内で文法化している動詞を確定し、統語要素へと変化する過程を記述すると同時に、文法化する動詞とSVC内で共起可能な動詞群を特定し、特徴を分析する。得られた結果から、文法化が起こる環境となるSVCの条件を絞り込み、その背景にある人間の認知を考察し、JSLの統語要素を生み出すシステムの解明を目指した。

<引用文献>

- ① Aikhenvald, A. Y. 2006. Serial verb constructions in typological perspectives, In Aikhenvald, A.Y. and Dixon, R. M. W. (eds.) Serial verb constructions: a cross-linguistic typology. Oxford Univ. Press, Oxford. 1-68.
- ② 市田康弘 2013. 「日本手話における動詞連続構文」, 日本手話学会第39回大会予稿集, 20-21
- ③ 今里典子 2007. 「JSLの移動表現について: 動詞に注目した予備的研究」, 『神戸言語学論叢』(5)
- ④ 今里典子 2010. 「行く・来る」を含む連続動詞構文: 日本手話/日本語対照研究」, 岸本秀樹(編)『ことばの対照』, くろしお出版, 15-26
- ⑤ 今里典子 2012. 「日本手話の視覚表現に基づく虚構移動」, 『神戸高専研究紀要』(50), 181-186
- ⑥ 今里典子 2014. 「日本手話における主語/目的語標示の助動詞について」, 言語研究 146, 31-50
- ⑦ Matthews, S. 2006. On serial verb constructions in Cantonese. In Aikhenvald and Dixon(eds.) 69-87.
- ⑧ Shibatani, M. 2007. Grammaticalization of converb constructions: The case of Japanese -te conjunctive constructions. In Connectivity in Grammar and Discourse, Rehbein J. and Hohenstein C. (eds.), Amsterdam: John Benjamins. 21-49.
- ⑨ Supalla, T. 1990. Serial verbs of motion in ASL. In Fischer, S. & Siple, P. (eds.) Theoretical issues in sign language research, vol. 1: Linguistics, 127-152

4. 研究成果

初年度に作成した動詞のリストと、それを利用して撮影した例文の分析から、JSLのSVCとは、述部を構成する一連の複数の動詞で、動詞の間に「領き・間」を含む別の形態素がないものと規定できるとした。但し、A. 「手の形」とその「位置」の複合として動詞に抱合される類辞(CL)

と、その CL を導入する為に現れる名詞(句)は動詞の一部と分析し、別の語とは考えない。B. また動詞と共に起る体の向き・傾き、顔・頭の動き、さらには口形などの非手指表現も別の形態素の中に入らない。

このような A, B の規定に従って一旦 SVC を認めると、JSL の SVC は、次の6つの条件:(1) 事態を構成する出来事が起こる順番通りに動詞が配列される、(2) 全動詞に共有される類辞 (CL) が事態の同一物を指示する、(3) 動詞は事態のすべてをカバーする、(4) すべての動詞が主語を共有する、(5) すべての動詞が方向一致制限に従う、(6) 述部の途中で(事態を観察する)視点の変更がない、を満たしていることが期待される。そしてそれらのうち、どの条件をいくつ満たさ“ない”のかが構文の種類によって異なっている傾向を確認した。例えば「ボールがゴールに転がって入る」ような典型的な移動の事態を表す移動構文では全ての条件を満たすが、「男がボールをゴールに蹴り入れる」ような事態を表す使役移動構文では(4)を満たさず、時にはさらに(5)をも満たさない例もある。受益構文と結果構文でも(4)を満たさない場合があるが、その場合でも(5)は満たす傾向がある。逆に必ず2つの動詞の主語が一致しない「父が息子に料理を作らせる」ような使役の事態では、(2)および(4)～(6)が常に満たされず、JSL においてこのような使役の事態は SVC で表現することはかなり困難であり、2つの独立した節の並列で表される可能性がある。

また SVC で、条件を全て満たす構文において文法化が進む傾向が確認できた。条件を全て満たす移動構文と、(4)を満たすことができる 受益・結果構文の SVC では文法化の例が観察される。次に移動構文・受益構文・結果構文の文法化が進む例について、2つの動詞で構成されている SVC の隣り合う動詞の意味は、例えば行為動詞:食べる+移動動詞:行く、のように、SVC を構成する隣り合う動詞に意味的関連がない、あるいは因果関係が見られない場合ほど、文法化している傾向がある。また逆に、移動の様態動詞(走る)+移動動詞(行く)のように、隣り合う動詞の間に深い意味の関連や強い因果関係が見て取れる場合には、文法化が進んでいない傾向が見て取れる。SVC の移動構文の中で文法化が進み意味が拡大する動詞「いく・くる」を例として取り上げ、いかなる動詞との組み合わせで文法化が進むのか、どのような文法要素がどの段階で生まれるのか、という状況をネットワークの形で明示的に示すことができた。JSL においても、JSL におけるルールに応じて、文法化によって文法要素が生まれ、言語システムが整っていくことが明らかになった。

一方、課題も残っている。本研究では、SVC 内での手指によるサインのみを対象に分析を進めていったが、実は口型などの非手指表現が、文法化に際して SVC に頻繁に共起することを発見した。非手指表現については、JSL にいくつ認められ、それらがどのような働きをするのかなど、その全貌が明らかになっているとはいえない状況である。今後の課題として、JSL における非手指表現がどのようなもので、文法化とどのように関わり機能しているのかについて、研究を進め明らかにする必要があると考えている。

最後に、副次的成果についても述べておく。音声日本語などに比べて研究が遅れている JSL のネイティブ・サイナーによるデータを撮影して記録保存することは、今後の JSL 研究のために重要なことであることを指摘しておきたい。これらのデータの存在は類型論の視点からも、視覚言語と音声言語の比較研究を可能にし、言語の本質に迫る可能性を高めることになる。さらに手話言語の文法の萌芽と背景にある人間の認知能力の関係の解明が「言語」システムそのものの解明につながることで広く言語理論に貢献できると考えている。

さらに実用的な面に関しても指摘しておく。多様性を認める成熟した日本社会において、今後予想される手話言語利用拡大時に、JSL の適切な辞書、文法書などが必要となることが予想される。手話通訳者の養成、効果的な手話指導法の確立、手話学習の推進、あるいはろう者の日本語学習サポート等ということを目的にすれば、背景に JSL データの蓄積と地道な研究成果は必須のものである。また日本語と JSL の間の機械翻訳、そして遠隔地を結ぶ通訳システムの開発を考慮しても、整理された言語データそのものが必要とされることが明らかである。膨大な撮影データや、分析結果としての言語学の研究成果は、近い将来、社会に具体的・実用的に広く還元できるものと信じている。

5. 主な発表論文等

[雑誌論文] (計 2件)

- ① 今里典子、「日本手話の移動事象表現」、神戸高専研究紀要、2017、55号、63-68
<http://www.kobe-kosen.ac.jp/activity/publication/kiyou/Kiyou16/Data/Vol155KenkyuKiyou10.pdf>
- ② 今里典子、「日本手話の「来る」の分析」、神戸高専研究紀要、2019、57号、55-60
<http://www.kobe-kosen.ac.jp/activity/publication/kiyou/Kiyou18/Data/Vol157KenkyuKiyou10.pdf>

[学会発表] (計 0件)

様式 C-19、F-19-1、Z-19、CK-19（共通）

〔図書〕（計 1件）

- ① Imazato, Noriko. 2016. Syntax of Japanese Sign Language, In Minami, M (ed.), Handbook of Japanese Applied Linguistics, Berlin/Boston, De Gruyter Mouton, 483-510

〔産業財産権〕

該当なし

〔その他〕

該当なし

6. 研究組織

(1) 研究分担者

該当なし

(2) 研究協力者

該当なし

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。